

## 荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ第1回会議概要

**日時** 令和4年8月29日(月)11:00~14:10 (途中昼休憩あり)

**会場** 北房振興局2階大会議室、荒木山西塚古墳

**出席者** 16名 (うち委員5名、アドバイザー2名)

**委員** 岡山理科大学生物地球学部 名誉教授 亀田 修一 (Web)、岡山理科大学生物地球学部 教授 (真庭市文化財保護審議会副会長) 白石 純、駒澤大学文学部 教授 寺前 直人 (Web)、国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学 教授 松木 武彦 (座長)、元津山市教育委員会生涯学習部 部長 行田 裕美

**アドバイザー** 岡山県教育庁文化財課 副課長 尾上 元規、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター センター長 (真庭市政策アドバイザー) 津村 宏臣

**事務局** 真庭市教育委員会 教育長 三ツ 宗宏 (途中退出)、生涯学習課長 谷岡 理江、生涯学習課主幹 新谷 俊典

**コンソーシアム構成団体** 北房文化遺産保存会 副会長 畦田 正博、庶務 平城 元、北房振興局 振興局長 大塚 清文、地域振興課長 畦崎 智世、地域振興課参事 江崎 仁、地域振興課主事 大久保孝晃

### 次第

**1 開会** 11時

**2 委嘱状交付**

代表で松木武彦座長に教育長から委嘱状交付

**3 教育長挨拶**

(三ツ教育長挨拶)

市民、大学、行政が連携し、市民参画で進める発掘調査、それを契機とした地域づくりという、全国的にも例をあまりみない取組みに挑戦しているところであり、市内外各方面から徐々に注目を集めているところ。真庭市は小規模な自治体で、専門職員の体制も残念ながら十分とはいえない状況。専門家の皆様が取組みに賛同いただき、支援協力いただけることは、調査の学術的な価値を担保しながら新しいチャレンジをするうえで大切であり、大変心強い限り。重ねてお礼申し上げます。

真庭市に限らず各自治体には多くの文化遺産が散在している、一方で少子化・人口減少はどんどん進んでいる。地域の宝ともいえる文化遺産を将来にわたってどのように維

持・継承していくことができるか、これは大きな課題。課題解決のためには、市民が少しでも文化遺産を身近なものと感じ、それを生かして地域の未来や将来を展望する、そうしたことがどうしても大切になってくる。今回の事業はそうした将来の展望を開いていく部分を大きな目標としている。同時に発掘調査を通じて、地域の新たな歴史が解明されることにも期待している。

市民参画による発掘調査ということで、従来の発掘調査と異なる課題や配慮事項も生まれるだろうが、適切な発掘調査を行い、それが活用に繋がる実り多い取組みになるよう、専門家の皆様から忌憚のないご指導ご意見をいただきたい。

#### 4 委員紹介

委員及び出席者紹介後に松木座長より挨拶  
(松木座長挨拶)

私は本日が日本の考古学や歴史・地方史といった文化分野の発展にとって記念すべき日ではないかと思っている。ここ5年、10年の間に、世界でも日本でも古墳など遺跡を取り巻く状況が非常に大きく変わりつつある。特に2018年、京都での世界考古学会議開催をきっかけに、「遺跡は誰のものか」、「歴史はどうやって、誰が作っていくのか」、考古学の世界でも極めて深く議論されるようになった。それと軌を一にするかのように、現在は専門家以外の様々な人々が古墳に価値を見出し、アートやアミューズメントなど古墳の多様な価値を多様なやり方で引き出していくよう変わってきた。それは古墳あるいは遺跡が、「誰か専門家のものではなく、私たちのものである」ということが社会の様々な人々によって意識された表れである。多様な方法で、多様な人々が未来に向けて文化財を守っていくんだという動きが活発になってきている。

今回の荒木山西塚の取組みは、真庭の方々が古墳の解明や価値の抽出に主体的に関わっていかうとする試み。ほぼ70年前、同じ岡山県北部・美咲町の月ノ輪古墳で、岡山大学の近藤義郎先生が和島誠一先生と主導されて、先端的な市民による古墳調査がくしくも同じ吉備の北部で行われた。、当時は皇国史観から市民の手に歴史を取り戻すという1つの大きなムーブメントが起こっていた時。私は極めて何か不思議な符合のようなものを感じる。真庭で70年後にまた新たなムーブメント、最先端が起こるのは決して偶然ではなく、岡山県北部の何か伝統的な市民文化に関わるようなものであると思っており、この取組みに期待している。

#### 5 事業の概要について

(1) 事業の概要 (新谷主幹より事業の概要説明)

(2) 事業の全体計画 (新谷主幹より事業の全体計画説明)

## 6 審議事項

(1) 令和4年度発掘調査計画について（新谷主幹より調査計画を説明）

(2) 実施体制・参加募集等について（新谷主幹より実施体制・参加者募集等を説明）

【質疑】

（松木座長）

事務局から今年度の調査計画に関する説明があった。ここまでところでご質問ご意見を頂戴したい。計画を検討するうえで、各委員やアドバイザーからも意見を寄せていただいていると側聞している。まずはトレンチの設定規模のこと、予定期間に終了できるか極めて重要であり、計画をしっかりと共有しておく必要がある。トレンチ規模は資料編P9・10に掲載されており、調査人数や日数、作業時間は説明あったとおり。それらを勘案し、この日程で調査が可能かどうか。

もう1つ、特に墳丘側のトレンチT1に断割りを設けるか、設けるならどの程度の規模か。断割りを入れると土量も増えるが、深さをどうするか。説明あったように、西塚古墳には埴輪列や葺石が無い可能性が高い。古墳の遺構面、本来の築造時の墳丘面の確定は、葺石があれば比較的単純だが、西塚古墳はそうでは無さそう。さらに言えば埴輪列があり埴輪片が多数出土する場合、流土と盛土以下の区別は埴輪片の含有でかなり見込みが付きやすいのだが、西塚古墳ではそれもあまり期待できない。ついては、墳丘面の確定が少し苦勞する可能性がある。最終的には断割りを入れないと、納得する形で墳丘面の確定はできないだろうと思う。ついては、入れ方をどうするかは別として、ある程度の断割りの実施は見込まざるをえないだろう。それを含んだうえで、この調査規模で妥当なのか、皆さんのご意見をお聞きしたい。

亀田委員や寺前委員、白石委員は学生を率いて様々な調査を経験されていますし、行田委員や尾上アドバイザーはたくさん古墳の調査経験をお持ちで、色々イメージしておられると思う。そのイメージと比べて、計画内容が現実味があるかどうか。いかがでしょうか。

（行田委員）

松木座長が言われたのは、断割りを入れた場合に作業手間や土量が増えるが、予定する調査期間内に終わることが可能かどうかということですね。断割りを入れるか、入れないか、ここで議論しても、なかなか予定どおりにはいかないと思う。現地の調査状況を見ながら、担当の新谷主幹が判断するしかないのではないかと。もし断割りを入れるなら、全体期間の中で調査が納まるようにやり方を工夫していただくのが一番だと思う。

（松木座長）

掘って見ないと分からないところが発掘調査には多分にあり、行田委員がおっしゃるのとおり調査状況にもよるだろう。その辺りの不確定要素もあるが、それを見越したうえ

で、この全体の調査規模や時間・人員を勘案し、現実性はどうか。

一委員の意見としてになるが、岡山大学にいた時に岡山県南でいくつか古墳を発掘した経験から、これだとほぼ現実的に無理はないのではないかと考える。

(寺前委員)

基本的には断割りを入れないと墳丘面の残存ラインは分からないということを前提に調査計画は進めた方がよい。断割りの深さについては未知数の部分もあるので、現地でのトレンチの最初の開け方、全面を一度に掘り進めるとなると、投入人数、作業効率、斜面地のため排土を下すことへの安全確保、周りの養生なども必要。それらを勘案して、現地の状況を見て開け方の順番を考慮する点も考えておかなければならない。現地を見学させていただいたが、墳丘の傾斜がきついので、その点は事前にイメージしておいた方がよいと感じた。断割りについては賛成。

(亀田委員)

断割りの話だが、上の方で掘り下げが止まっており、確認したら実はさらに下へ掘り下げることができたというのは良くあること。せつかく調査する以上、断割りによる確認は最低限必要なことだと思う。開け方に関しては、まさに状況次第。私たちが発掘する時はスコップ 1 本分の幅での断割りなど、幅 50cm もない場合がある。寺前委員もおっしゃったとおり、開け方は深さ等でも変わってくるので、やってみてどうなのかという中で進めればよい。基本は断割りを入れるつもりで進めていくということでよいと思う。今回の調査の目的の 1 つは、墳端がどこなのか、どういうふうな土を積んでいるのかという話になると思う。そうしたことは当然断割りを入れないと分からない。トレンチに傾斜があるので、上がり降りなど安全確保も必要になるが、基本的に断割りを入れるつもりで進めるのがよい。

それから、日程については、天気とか様々な要素も考慮しないといけないが、それほど無理があるようには見えないので現計画で進めればよい。

もう 1 点。T1 は後円部墳頂側平坦面の手前ギリギリのところでは止まっているように資料編 P10 の図では見える。可能であれば、せめて墳頂部側 1 m ぐらいは伸ばして、ここが墳頂部と言及できるところまで確認しておいた方がよいと思う。

(事務局／新谷主幹)

(現地での撮影写真を画面共有した後) 現地でトレンチ位置を想定して目印をつけているが、資料編 P10 のトレンチ位置に比べ、もう少し平坦面がかかる位置にトレンチを設定するよう計画している。

(亀田委員)

分かりました。

(松木座長)

今までの皆さんの意見をまとめると、大枠として無理のない計画と皆さんお認めいただいていると思う。その上でトレンチに断割りを入れる必要性については、委員の間で

も多少の温度差はあるが、皆さん掘ってみてからの判断ということなので、担当の新谷主幹が臨機応変に判断しながら進めていくことでよろしいのではないかと。

その他の細かい、開ける順番なども同じことで、計画の大枠の中で細かい部分は臨機応変に進めていけばというのが大方のご意見ではないかと思う。

(尾上アドバイザー)

排土を土嚢袋に詰めて運搬と書いているが、これはトレンチのすぐ傍に置くのではなくて少し離れたところへ置いておくつもりか。

(事務局／新谷主幹)

T1は墳丘斜面なので、手箕で一度降ろすか、平坦面へ上げた上で、排土のふるい掛けして袋に詰めて溜め置くことを考えている。T2は古墳からは外れ、傾斜もなく比較的トレンチ近くにまとめて何ブロックかに分けて置く予定である。

(尾上アドバイザー)

鬼ノ城の発掘調査の際、掘った土を全部土嚢袋に詰めたことがあるが結構手間で時間がかかる。特に埋戻しが予定では1日になっており、時間が足りるかが心配。3月6日以降1週間くらいは予備日にしているが、埋戻しが伸びても使えるということか。

(事務局／新谷主幹)

3月5日に埋戻しが終わらない、天候等では5日に着手できないということもありうる。その時は6日以降に埋め戻すようになる。いずれにせよ年度内には発掘したところは埋め戻すよう予定している。

土嚢袋に排土を全部詰めるのか、労力もかかることであり、やってみない分からないとという部分もある。土嚢袋を積んで枠囲いを作り、その中に排土を入れて管理する現場もあった。一番は排土が流出しないことで、その対策がとれるなら、現場の進捗状況にあわせ、もう少し負担の少ない方法も考慮しておく。

(尾上アドバイザー)

土嚢袋に詰めるようになると、思った以上に時間がかかるようになる点は見込んでおいてほしい。

(松木座長)

その辺りも見込んで、大枠としてはこうした計画で取り組んでいただきたい。発掘調査の計画本体についてはそうしたところです。

次に情報発信の在り方についても説明があったが、最近の発掘調査では社会に向けての情報発信にも非常に重きを置かれている。また、この取組み自体がそういう部分にじっくりと足をつけた事業で、情報発信の在り方は極めて重要と考える。本体資料P6に少し書かれているが、他に資料はあるか。

(事務局／新谷主幹)

本体資料のみで他に付けていないが、画面共有をご覧ください。津村アドバイザーとも発信方法を相談し、西の明日香村コンソーシアムとして特設ホームページを立ち上げ

るよう考えている。これは真庭市ではなく、津村アドバイザーの協力で同志社大学側のサーバーを借り、技術も提供していただいたの立上げとなる。市のホームページでも行政情動的なものは掲載するが、入口としてはコンソーシアムのホームページを位置づける。また SNS を用いて、コンソーシアム関係者だけでなく、一般参加者、見学者にも自由に発信いただきたい。SNS とコンソーシアムのホームページをリンクし、SNS から誘導しつつ、情報発信の中心となるのはコンソーシアムのホームページというイメージ。ブログのような形式で、出来事や WG の紹介、活動紹介などを掲載するよう考えている。動画については YOUTUBE を利用して配信し、それもコンソーシアムのホームページのリンクして、ホームページからたどり着けるようにする。津村アドバイザーから補足があればご意見いただきたい。

(津村アドバイザー)

新しい試みとして、技術的課題はあるが、24 時間オンラインで現場からの映像配信ができないか検討している。実現できれば、子どもが参加している親御さんが YOUTUBE で様子を見ることや、現場でどういうことがされているか、専門家にもオープンな形で公開することができる。ホームページから発掘風景をオンタイムで見学できる状況を作っておいて、後は説明があったようにオフィシャルな情報の公開、SNS とのリンクを同時にやっていければと考えている。

(事務局／新谷主幹)

インターネット上の情報発信だけでなく、地域住民やネットを利用しない方には従来通り紙媒体を利用する。発掘調査に関しては教育委員会で調査概報を速やかに作成する。それ以外にも北房振興局の地域だより「北房通信」、北房文化遺産保存会の会報「荒木山通信」など既存の紙媒体で地域内で取組みを知っていただけるようにする。学校でも壁新聞作成など成果物に取り組むなど、紙媒体による情報発信を考えている。

(松木座長)

非常に多様かつ具体的に考え。特にデジタルの発信は津村先生が理念的にも技術的にも第一線の方で、今回新しい試みもやっていただける話で、非常に期待できるように思う。紙媒体の方も、先ほど「荒木山通信」を拝見したが、非常に美しく、地域文化の香り高い、良い印刷物という印象。これに西塚古墳の発掘調査のことが掲載されるのは非常に良いなと感じた。情報発信についてはこれでよろしいですかね。

時間も迫ってきていますが、後は実施体制や参加者募集も先ほど事務局から説明があったが、それも含めて全体を通して、令和 4 年度の計画についてはよろしいでしょうか。

<< 了承 >>

(3) 令和5年度発掘調査計画について（新谷主幹より計画内容等を説明）

【質疑】

（行田委員）

資料編 P10 の前方部左側の網掛け部分は調査できないということですか。

（事務局／新谷主幹）

網掛け部分は、地権者との協議結果や墓地利用などの理由で、発掘調査の対象から除外した区域。ついては、トレンチを入れる対象からは外している。

（行田委員）

そこが掘れないから削平されている前方部右側にトレンチを入れざるを得ないというわけですね。前方部右側の平坦面はかつては畑だったのか。掘って見ないと分からないが、現況として盛土は残ってそうか、既に削平されてそうか。

（事務局／新谷主幹）

かつて畑地として開墾したと聞いており、前方部は大幅に削平されている状況。

（行田委員）

どの辺りまで削平されていたかは、今は分からないのですか。

（事務局／新谷主幹）

資料編 P10 でいう前方部右側、コンターの 186m あたりが削平された後に土を被っている状態か、土が被らないでこの状態であるか分からない。また、この部分は史跡指定から外されているが、調査の結果まだ古墳が部分的に残っているということになれば指定も考慮していく必要がある。その状況で現位置へのトレンチ設定を考えている。

（白石委員）

後円部から前方部にかけての中央部、主軸上での調査は考えていないのですか。

（事務局／新谷主幹）

今のところ墳端側を中心にトレンチ設定している状況。

（白石委員）

いずれ県指定を目指すことも考えているのですよね。

（事務局／新谷主幹）

はい。

（白石委員）

そうすると計画トレンチのみではあまり成果が出ず不十分な可能性もあるのでは、時間や作業労力も考えないといけないが、主軸上の中央部もしっかり抑えておいた方が良いでしょうと思う。

（松木座長）

基本的に第一目標は墳長の確定。それから前方部の形状やくびれ部の有無を中心としたプロポーシヨンの確認。例えばどの古墳と設計が重なるかといったところになってく

と思うので、まずはそれに一番近い情報を得ていく。白石委員のおっしゃった主軸上の情報も重要ではあるが、この2年間ではちょっと厳しいといったところだと思う。2年で成果が挙がってまた次、ということになればその辺りも次の目標になってくると思うのですけれども。

その他主体部の取り扱いなども含めて、ご意見ありますでしょうか。

<< 意見なし >>

主体部につきましては、先ほど事務局から説明があったとおり、津村先生の方でスコープを入れたり、探査をされると聞いた。なので、2年間全く何もやらないというわけではない。最新の技術で何か明らかになる情報もあるのではと期待するが、津村先生の見込みはいかがでしょうか。

(津村アドバイザー)

2018年度の探査結果では、現状で乱掘墳とされている部分が本来石室なのか、本当に乱掘墳なのかがちょっと分からない状態である。これよりも下に空間があって、そこを掘りにいった乱掘墳が今見えているのか、これが石室でさらに下にも何かが存在するのか現状では判断できない。ファイバースコープを入れて、上がった乱掘墳なのか、石室の何か形があるのか確認するのが今年度の課題と考えている。

もし、上が石室だという判断になれば、現状のまま残して良いかどうか、古墳のご専門の先生方に判断していただかないといけないだろう。私が北房に来るようになってここ4、5年でもかなり崩れているように感じる。これが乱掘墳なら大きな問題ではないかもしれないが、スコープ調査で石室の壁でも出てきたらちょっと検討いただかないといけないように感じる。

(松木座長)

石室が原位置だとしたら墳頂平坦面が結構削平されているということにもなってくる。今回目標とする墳形の確認にも繋がってくる問題なので、スコープ調査でそれ相応の成果が得られることを期待する。

<< 了承 >>

#### (4) その他(新谷説明)

- ・第2回会議を11月末頃、第3回会議を令和5年3月初め頃に開催することです承。
- ・会議記録の真庭市ホームページ等での公表について了承。

(松木座長)

審議事項は以上だが、他に皆様から何かありますか。

(行田委員)

調査期間すべてを通して担当の新谷主幹が現場に常駐することになるのか。

(事務局/新谷主幹)

原則として常駐。



(行田委員)

新谷主幹がもし新型コロナに感染するとか、出られない時には他の職員が代行することになるのか。やはり現場で何があるかは分からないので、専門的な部分は別として、新谷主幹が居ない時には市の職員の誰かが現場へ出て居た方がおくことが必要だと思う。

(松木座長)

その辺りのことも事務局で少し手当しておいていただきたい。同時にそういう時に、例えば経験豊富でお近くにおられる行田委員に調査へ参加していただくのはいかがでしょうか。

(行田委員)

もしそうした状況になるようなら、可能であれば協力する。

(松木座長)

よろしく願いいたします。

< 昼食・休憩 12:40~13:20 >

7 現地実査

8 閉会 14:10